



## 巻頭言

# 小児科学は保育学だった

榎原 洋一



私が専門としてゐる小児科学と保育学の間にはたくさんの共通点があります。業種として考えれば、最近の少子化で、お互いにある意味で構造不況業種である、といったこともつらい共通点ですが、もっと本質的なところに共通することがあります。



まず、ともに成長発達の過程にある子どもを対象としているということです。小児科学は基本的には病気の子どもを対象とするのに対し、保育学は健康な子どもを対象とするといった違いはもちろんです。しかし、小児科学も保育学も、子どもの安寧で健康な発達を手助けするという共通の役割をもっています。かつて、イ



ギリスの精神医学者ポールビーは、第二次世界大戦後の戦争孤児に発達の障害が多い原因を調査し、子どもは十分な栄養と身体の安全が確保されるだけでは、健全な発達が望めないということが明らかになりました。子どもが一人前の大人に育つためには、物質面、精神面両面での支援が必要であり、小児科学、保育学はともに入った条件を満たすことを活動の目標にしています。

主な対象は子ども自身ですが、子どもを取り巻く環境、特に親や家族への働きかけが必須の活動内容であることも大きな共通点です。子ども自身よりも、親との対応で苦労することも同じです。子どもだけでなく、子どもにとってもっとも影響力のある大人である親に対しても、働きかけるといふ点も共通しています。

もともと、子どもを健やかに育てたいという思いは、時代や場所を問わず大人の共通の思いでした。子どもが心身ともに健康な大人になるためには、まず身体が健康に育っていく必要があります。そのためにもどのような食べ物を与えて身体を丈夫にし、病気の時にはどのように対応すればよいのか、といったことを経験から得られた知識を体系として纏めたのが小児科学の始まりです。しかし、子どもは栄養を十分に補給し、病気になったら治す、だけでは、一人前の大人に育つわけではありません。トイレトレーニングから始まって、基本的な生活習慣や、しつけや行儀などの社会技能（ソーシャルスキル）を身につけなければなりません。つまり、現在



保育の現場で行われている人間としての基本的な生き方を身につける必要があったのです。

現在は小児科学と保育学が受けもっている人生初期の支援を、江戸時代には医師が担っていました。香月牛山（かずきござん）は、「小児必用養育草」（しようにひつようそだてくさ）という日本最初の体系的な育児書を著した医師です。香月牛山は一六五六年に筑前に生まれ、貝原益軒に学んだのち医学を修めて、中津で医業を営んでいました。小児必用養育草は六巻からなる書物で、一、二巻が乳児期の育児について、三、四巻が子どもの病気について、そして六巻が教育に当てられています。その内容を見ると、妊娠中の注意から始まり、出産後のケア、母乳の与え方などの育児に関する事項に続いて、さまざまな病気の治療について述べられています。さらに、子どもの食事の内容、衣服の選び方、生活習慣のつけ方、しつけといったことに多くのページが割かれており、子どもの育ち全般の専門家であったことが窺えます。

香月牛山の先生である、貝原益軒は養生訓を著した医師ですが、「貝原篤信家訓」という幼児の教育原則の書を残しています。

このように、現在小児科学の仕事である子どもの病気を治すことは、子どもを育てるといふより、より広い営為の一環としてとらえられていたのです。



現代の小児科学は、自然科学として大きく発展し、子どもの発達について遺伝子や脳科学などの先端科学を取り入れています。一方、保育学は、子育ての人間科学の応用分野として現在に至っています。その結果、同じ子どもの成長と発達を見守る専門家集団でありながら、大変に異なった方法論をもつ集団にそれぞれ分化してきています。

しかし香月牛山のように歴史的にみると、小児科学と保育学はもともとは同根であったことが分かります。そしてその後異なった経緯を経て現在に至っています。

現在、やや科学的還元主義に偏った小児科学では、入院している子どもや慢性疾患の子どものQOL (quality of life) をみなおすようになってきています。

また保育学にも、発達心理学や脳科学、人間工学などの知見を取り入れていこうという気風が生じつつあります。

少子化や、幼保一元化という時代の大きな波は、小児科学や保育学にとっては大きな試練ですが、同時に変革のチャンスでもあります。小児科学と保育学がお互いのルーツを確認しあうとともに、再びお互いのこれまで発展させてきた方法論や知見を共有化しながら、一緒に子どもの専門家として協働していく必要があると思います。

(お茶の水女子大学)